

## 書籍紹介 『湿地帯中毒—身近な魚の研究史』

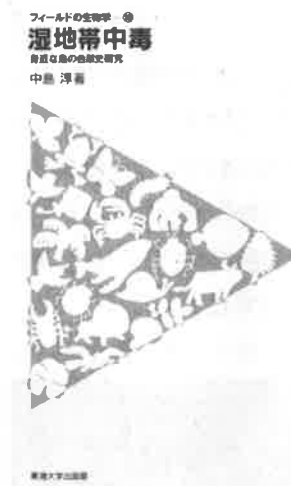
中島 淳(著)、東海大学出版部、2015年10月、258頁、2000円

佐々木 梢・浅川 満彦 (酪農学園大学 獣医学群)

本書は魚類寄生虫をテーマにしたいという学生・佐々木とその指導教員・浅川が、野生魚類の研究者の最新状況の把握のため掻き集めた書籍群の一つである。まず、前段で件学生が概要を、次いで後段でフィールド研究などについての拙見を記す。(文責 浅川)

最初にタイトルを見た際、タイトルをそのまま受け取って、湿地帯に生息する身近な魚において発生している中毒、つまり環境問題について取り扱った本だと解釈した。しかし、ページをめくってみるとその解釈が間違いであることがすぐわかる。「はじめに」の一段落目から「幼い頃から身近な湿地帯とそこに棲む生き物をこの上なく愛していた。年がら年中、湿地帯に赴き——本書はそんな湿地帯中毒患者の研究者としての生き様を記したものである。」と断っているからである。その言葉通り、著者の研究テーマの決定の瞬間から研究道中での思考の推移、仮定・検証における失敗や成功、そしてどのようにして論文として形になっていくのかが修士・博士課程の制度と共に事細かに記されている。また、研究に関する様々な細かい知識が、文章中にちりばめられているだけでなくコラムとして複数まとめられており、雑誌を読んでいるかのように飽きさせない。タイトルから(恐らく)一瞬想像される環境問題に言及するような小難しい内容どころか、フィールド系の研究を目指す学生の指南書にも、自然史に関心のある人の読み物にもなりうる幅の広い教養本であった。

本書では全体的に写真や図がふんだんに盛り込まれ、淡水魚類や水生甲虫類についての知識を全



く持たない人にも理解できるように、やさしく、わかりやすく説明されている。第一章では、著者の学生時代の主な研究テーマである淡水魚・カマツカとの出会い、そして研究テーマとなるまでの過程から卒業研究・修士課程を終えるまでの道りがユーモアたっぷりにまとめられている。第二章では博士課程に進んでから修了するまで、第三章では著者が学位を取得した後に取り組んだ研究についての紹介を、そして第四章では伝記さながらに著者の幼少期から大学までの知的好奇心の推移について、道草を交えつつ、その他学位取得後の苦労等が事細かに記されている。

院への道を考えている身としては、無論修士・博士過程の流れもそうだが特に最終章の学位取得後の文章に興味を持った。これまでの文章と比較して短く簡潔にまとめられているものの、学位取得後の就職の流れや自分の売り出し方、非常勤研究時代(いわゆるポスドク)の著者の給料の額から常勤研究職員として働きだすまでの葛藤や妥協が細かく書かれている為、最初はすごいなあ、分野が違うとこんなにも世界が違うんだなあ、と

いう程度で軽く読んでいたのが最終的には眉間に皺を寄せつつ、目を皿のようにして読む体制に変化していた。良くも悪くも、研究の道に進むことの大変さが現実的に描かれている為、研究者に対する夢と希望に溢れた気持ちを持って本著を読むといささか気を削がれる人もいるかもしれない。ただ、具体的にどのようなことを院でやるのかを知りたい人や、研究に行き詰っていたり、進学後に将来への不安を持っている人にとっては本の具体的な内容はもちろん、著者の四苦八苦しながらも研究に邁進する姿やユーモラスな語り口には勇気づけられるに違いない。(文責 佐々木)

老眼のため、副題を見落としのため、「湿原中毒ならボツリヌス中毒だろう」と想像していた。(野生動物の) 病と伴に暮らすものは「中毒」というような語にどうしても敏感になるが、もちろん、本書はリアルな病とは無関係である(前述の通り)。ところで、p234の著者がポストドク時に実施された九州内における魚類相調査ポイント数は尋常ではない。おそらく、この方がある一箇所の建物に無理やり押し留められるような事態に陥った場合、非常に深刻な病状を呈すことは明かだ。それにしても、本書は生物多様性研究はこのようなフィールド中毒の患者が支えていることを再認識させてくれた。p237-238のコラムで、「記載的(≡枚挙的)自然史研究」の意義を生物多様性基本法との関連付けで論じてはいるが(≡こじつけようとはしているが;失礼!), 法規の後押し、あるいは人類全体の宝のような捉え方は最大公約数的で上品な説明。おそらく、著者ご自身がご存じのはずなので、これ以上、言及はしないが、そもそもの原動力が高度な癖(へき)、ほとんど「病気」である。そして、大学教員は、もし、このような素因を有した学生を見出してしまったら、悲劇的な事態を招かないよう適切な治療を施さなければならない。すなわち、万難を排しフィールド研究の課題を用意し、可能ならそれで生きていけるような舞台を創造する。そう、若き才能溢れる人材を救うため

にも「自然史研究」は治療・予防薬として必要不可欠なのである。動物科学系私大に勤務する紹介者に、そのような決意を迫った本なのである。

本書で扱われた主課題はカマツカあるいはスジシマドジョウなど(本書副題には「身近な」とあっても、紹介者にはちょっと・・・)淡水魚の地理的分布、ファウナ、生活史などであるが、実は、サイドメニュー的な扱いである昆虫の記述も、是非、注目したい。実際、本書巻末文献表にある著者筆頭論文32本中13本(\*)が水棲昆虫類に関するものなので、本当なら本書でもかなりの頁数を占拠したかったに違いない(\*この他、本書著者が共著になっている魚・昆虫の論文も数本有)。それはともかく、昆虫に魅了されたのは著者が学部時代に所属した学生サークルの影響であったという。その頃の出来事を活写したp204以降の記述は実に楽しく読んだ。なにしろ、実名が出ている方々、著者に劣らず立派な患者さんばかり。紹介者も勤務先で野生生物の生態や分布などを主眼に活動する学生サークルの顧問で、この記述のせいか、野幌の森で闊歩する彼らを見るたびに「ああ、こいつらも、立派な患者になるんだな」と密かに想像するようになった。そして、大概の患者予備軍が大学院を目指す。そのような院生志向のものにも、是非、読んで欲しい(前述の通り!)。学会(学術集会)における厳しさと楽しさ、論文公表のしんどさ、修了後の将来などなどが実に具体的に、かつ生き生きと記されている。

疾病論的に「中毒」とは毒素により惹起される病(やまい)で、原因となる毒素を除去すればその疾病は終焉となる。だが、本書で扱われた著者の「病状」あるいは罹患した「疾病」は、確実に、若い患者予備軍を魅了し、彼らの心に潜伏していた素因を顕在化させる効能があった。そうすると、題名は「中毒」よりも「感染症」(病名はフィールド熱?)とした方が適切であろう。きっと、『Field Note』の愛読者も(だからこそ)、本書を一読すれば、罹患することになるろう。ご愁傷様。(文責 浅川)